稲富健一郎先生の公開講座史

- 28年間市民に向かって語り続けた一人の大学教授について一

山本 珠美 (青山学院大学)

1. はじめに

これまで大学教員として過ごしてきた間、多くの諸先生方から教えを受けてきたが、 その中でも故稲富健一郎先生は特別お世話になった先生の一人である。

次項以下で詳しく述べるが、稲富先生は香川大学教育学部で 36 年間、定年退官後は香川県立保健医療大学教養部で 4 年間、英語・英文学を教えていらした。私が前任校の香川大学生涯学習教育研究センター(当時;1978 年度に大学教育開放センターとして設立、1991 年度上記に名称変更、2018 年度から地域連携・生涯学習センター、2022 年度より地域人材共創センター;以下、すべてセンターと略す)に着任した時には保健医療大学にお勤め中だったのだが、地域住民対象の香川大学公開講座は定年前と同様に続けていらして、センターでしばしばお会いしていた。最終的に 28 年間継続することになる稲富先生の公開講座は「名物講座」として知られ、私も時々聴講させていただいた。稲富先生の警咳に接することで、「公開講座とはどうあるべきか」について考えさせられたものである。

稲富先生がお亡くなりになってから 10 年近い月日が経とうとしている。大学公開講座や大学開放について人前で話す機会を与えられた際、しばしば稲富先生のことは話題にしてきたが、この間、いつか稲富先生について書きたいと思い続けてきた。大学の使命は教育、研究、社会貢献の 3 つであると言われて久しいが、教育や研究ほどには社会貢献が重視されているとは言い難い。現在でさえそうであって、公開講座担当者を見つけることは難しいと言われる中、稲富先生は 1980 年代半ばという今から40 年ほど前から、お亡くなりになる直前まで、一度も中断することなく公開講座を続けてこられた。延べ受講生数は 1,395 名にのぼる。稲富先生ほど長期間にわたって、多くの市民を教えた大学教員が国内に他にいるのかどうかは分からないが 1)、香川大学および我が国の大学公開講座の発展に寄与した人物の一人であることは間違いないだろう。その原動力は何かを探ってみたいと思い、本稿を執筆することにした次第である。

主に用いる資料は4点である。一点目は、香川大学生涯学習教育研究センター『稲

Japan Organization for the Promotion of University Extension

富健一郎先生を偲ぶ I ~公開講座の記録~』(2013 年;以下、 I と略す)で、公開講座の全記録と、先生が生前センターの各種刊行物に寄稿した文章やセンターが保管していた音声記録を文字起こししたものをまとめた追悼記念誌である。二点目は、同『稲富健一郎先生を偲ぶ II ~受講生からの声~』(2014 年;以下、II と略す)である。2013 (平成 25)年 11月 25日にセンター主催で「故稲富健一郎先生追悼の会」を開催したのだが、来場してくださった受講生に追悼文の執筆を依頼し、寄稿いただいたものを後日まとめたものである。寄稿者の中には 28年間一度も欠かさず受講し続けた「皆勤賞」の方もいる。

以上2点は先生の死後に編まれたものであるが、残り2点は生前のもので、稲富健一郎先生退官記念事業会『英語ー研究と教育:稲富健一郎先生退官記念論文集』(2002年;以下、論文集と略す)と、稲富健一郎『シェイクスピア英国歴史劇(香川大学教育学部研究叢書5)』(1995年;以下、叢書と略す)である。前者は定年退官時に香川大学教育学部の英語教育講座の先生を中心に編纂されたもの、後者は稲富先生のシェイクスピア研究をまとめたものである²⁾。

なお、引用は原文とおりとし、年代の異なる文章が混在している I からの引用の際には、初出年も記載することとする。

2. 稲富健一郎先生について

(1) 経歴

はじめに、稲富先生の経歴を、論文集に掲載されている履歴に従って、簡単に紹介 しよう。

先生は1939(昭和14)年3月16日、鳥取県鳥取市に生まれ、1959(昭和34)年3月に鳥取県立鳥取西高等学校を卒業している。高校卒業時に既に20歳となっていたわけだが、これは高校2年生の時に肺結核のため1年8ケ月入院し療養生活を送っていたからである。入院中病床で内外の文学を読み耽り、高校に復帰する頃には「興味は電気から詩へと移っていた」(稲富健一郎「感謝の言葉―退官に際して」、論文集、p.2)という。

1960 (昭和 35) 年 4 月に広島大学文学部文学科英文学専攻に入学すると、小川二郎先生のもと、肺結核のため 25 歳の若さで逝ったロマン派の詩人キーツに没頭した。1964 (昭和 39) 年 3 月に学部を卒業すると、広島大学大学院文学研究科英文学専攻修士課程に進学し、1966 (昭和 41) 年 3 月に修了した (文学修士)。そして同年 4 月に香川大学学芸学部 (のち教育学部に名称変更) に助手として採用され、以後、1969 (昭和 44) 年講師、1971 (昭和 46) 年助教授、1980 (昭和 55) 年教授となり、2002 (平成 14) 年 3 月に定年退官を迎えられた。その後、2004 (平成 16) 年 4 月に香川

Japan Organization for the Promotion of University Extension

県立保健医療大学教養部教授となり、2008 (平成 20) 年 3 月に定年退職された。2013 (平成 25) 年 7 月 9 日、香川県高松市で逝去。74 歳であった。

(2) 英国留学~二つの側面~

稲富先生は、香川大学在職中に二度英国留学をされている。一度目は 1974 (昭和 49) 年 9 月から 1975 (昭和 50) 年 9 月までの一年間、文部省在外研究員として、ロンドン大学ウエスト・フィールド・コレッジに留学、ブリティッシュ・カウンシル・ステューデント・センターでも研鑽を積まれた。二度目は 1981 (昭和 56) 年 9 月から 1982 (昭和 57) 年 9 月までの一年間、この時は私費であったが、ロンドン大学ウエスト・フィールド・コレッジに再留学し、あわせてキングズウェイ・プリンストン・カレッジでも研鑽を積まれた。

先生は、香川大学赴任後もしばらくキーツを研究し続けていたが、しばらくすると研究の対象はキーツが大きな影響を受けていたシェイクスピアへと移っていった。すなわち「当時、J. M. Murry の Keats and Shakespeare を読んで感動したこともあって、私にとってシェイクスピアは絶えず気に掛かる存在であり続けた。キーツはシェイクスピアを神のように崇拝し、彼から深い影響を受けていることが、研究を進めるにつれて次第に明らかとなってくる。こうして、私もまた、マリーのようにキーツを通して、シェイクスピアに接近して行くことになったのである」(叢書、p.i)。英国留学の目的は主にシェイクスピア研究のためであった。

以上が、主に論文集に書かれている「表の留学経歴」である。しかし、実はここに は書かれていない、もう一つ重要な留学先があった。モーリー・コレッジである。

稲富先生を語るに際し「公開講座」が欠かせないことは、論文集冒頭の「大学教育開放センター時代以来 15 年間の長きにわたり、Shakespeare、Wordsworth や Keats など、ご専門の一端を学外の方々に講義してこられた。今で言う「大学の地域との連携」の先がけであった」(藤井昭洋「稲富先生のご退官に際して」、論文集、p.1)という文章に明確に表れているが、この引用に続き次のような一節がある。

そういう一途なご専門への心入れの一方で、海外でも著名な声楽家に師事され 研鑽を積まれて、プロとしても通用する歌声で、オペラや他の音楽公演を続けら れ、社会との交流を果たしてこられた。なかなか出来ないことだと思う(同上)。

稲富先生がお亡くなりになった約半年後に開催された稲富先生追悼演奏会のパンフレットにも、次のように書かれてある。

2 度に渡る渡欧も含めて音楽を本格的に勉強され、音大卒のプロに匹敵する素

晴らしいソロ歌手として、また指導者としてご活躍されました。彼が指導した高松一高生二人がその年の芸大の声楽部門の現役合格者2人を独占したことなど知る人ぞ知る快挙です。

そしてさらにコーラスの指導者としての慈愛に満ちた指導ぶりはもう説明の必要もないでしょう³⁾。

稲富先生は二度の英国留学において、シェイクスピア研究の合間を縫って、声楽の勉強もされていた。このエピソードは、時代は異なるが、明治期の九州帝国大学医科大学教授榊保三郎を彷彿とさせる。榊は九州帝大医科大学の前身となる京都帝国大学福岡医科大学の精神病学講座初代教授であるが、一方で当代一流のヴァイオリン奏者であり、1909(明治 42)年には日本最初のアマチュア管弦楽団の九大フィルハーモニー会を設立し指導にあたった。ドイツ留学時、精神病研究の合間にヴァイオリンのレッスンを受けていたことは有名な話である。

それはさておき、稲富先生は英国留学中、モーリー・コレッジにて声楽をはじめいくつかの講座を受けていた。モーリー・コレッジは 1889 年に「労働者大学」として設立された生涯学習のための施設である。このモーリー・コレッジでの経験が、二度目の留学からの帰国後に開始されることになった公開講座に大いに影響を与えたのである。

(3) モーリー・コレッジの思い出

稲富先生は、英国留学から帰国して 3 年後、1985 (昭和 60) 年度にはじめて公開 講座を担当することになった事情を、次のように語っている。

当時の大学教育開放センター長益田先生より、講座を担当してはどうかというお誘いを受け、直ぐにお引き受けした。一つには、シェイクスピアの特に『ハムレット』と『リア王』について、それまで考えてきて、心の中に醗酵しつつあったものを何らかの形に表現することによって客観化したかったからであり、もう一つには、センターが推進している生涯教育に少しでも役立つことができれば幸いだと考えたからである(I、p.19; 1991 年)。

公開講座の担当を引き受けることにした理由として、二つの理由を挙げている。一つはシェイクスピア研究を何らかの形にすること、もう一つが生涯教育に対する関心である。後者については、上記に続けて以下のように語っている。

私が生涯教育に引かれていたのには、理由がある。幸運にも、1974-5年、81

-2年にそれぞれ1年ずつロンドン大学に留学することができた。その時、大学 で講義のない時は、テムズ川の南にある生涯教育のみを扱うモーリー・コレッジ に毎日通ったのである。カリキュラムは人文学、社会学、科学、芸術など、あら ゆる分野にわたっており、講師も一流の人々が当たっていた。今も懐かしく思い 出すのだが、小さな子供と一緒にフランス語を学びに来ているお母さん達や、哲 学を研究するお年寄りや、小説を楽しむ地下鉄の運転手さんや、オペラを歌う建 築士さんなど、あらゆる階層からあらゆる年代の人々が学ぶために集まるモーリ ー・コレッジは、大学を卒業すれば殆んどの人が学ぶことを止めてしまう日本か ら来た私に、新鮮な感動を与えてくれた。そこで私は英国に於ける生涯教育の伝 統の深さを肌で感じ、学ぶことの楽しさを知ったのである。学ぶことが苦しみで はなく楽しみであることを知れば、どうして学校卒業とともに学ぶことを止めて しまうことができようか。モーリー・コレッジでは、大学とは違う人々と友達に なり、多くのことを学ぶことができた。サッチャー首相がモーリー・コレッジの 予算を削減するという危機に直面して皆で署名をしたこともあった。教育には金 がかかる。英国が教育に多くの金を使ってきたことは確かである。今、日本は経 済大国だという実感は私にはないのであるが、そのように言われている。そうし た状況の中で、文部省が生涯教育に力を入れるようになったのは、大変良いこと だ (同上)。

また、別の文章では次のようにも語っている。

二度の留学生活で今でも忘れることができないのは、テムズ河の南にある生涯教育の大学モーリー・コレッジにも、通ったことである。無料同然の授業料で哲学、文学、語学、音楽の授業に出席する事ができ、多くの英国人と接することができ、今でも交流している友達ができた。授業以外でも、コレッジに完備されているレストランで、講師や受講生と食事をしながら親しく話し合ったり、深夜までコレッジのバーで人生の様々な問題についてお喋りをしたものである。自転車で遠い道のりを宿舎に帰りながら、外は寒くても、心が温かかった。それは本当に懐かしい思い出である。モーリー・コレッジは、政府が巨額の支出をして一流の学者や芸術家を指導者として迎え、あらゆる面で充実しており、香川大学より遥かに長い歴史を持っている。もともと香川大学に大学開放センターが文部省によって設置されたのも、そうした英国の生涯学習制度に見習ってのことであろうと思われる(I、p.22;1999 年)。

論文集には一度も出てこないモーリー・コレッジであったが、センター刊行物では

しばしばモーリー・コレッジの思い出を語っており、「日本でもモーリー・コレッジみたいなことが出来ないかなと。(中略)原動力になっているのはイギリスでの経験があることは確かですね」(I、p.26;2008年)「この講座を持続させる情熱は、確かにその時(山本注:モーリー・コレッジに通った時)与えられたのである」(I、p.30;2008

こうして 1985 (昭和 60) 年度にはじまった公開講座は、「最初、四大悲劇を単年度だけで終わる予定が、受講生の方々のセンター長への強力な直訴により、次年度の計画が決定された後であったにもかかわらず、開講されることにな」り(同上)、結果的に 28 年間一度も途切れることなく続いたのである。

なお、モーリー・コレッジについては、本稿末尾の補遺を参照されたい。

3. 時代背景~「開かれた大学」と生涯学習~

稲富先生が公開講座による地域住民の学びへ関心を持たれたのは、英国留学時のモーリー・コレッジの経験が大きいにせよ、当時の日本の大学の動向からも影響を受けていたであろうと思われる。否、稲富先生の関心が、日本の大学が目指そうとしていた方向と幸運にも一致したと書いた方が正しいかもしれない。ここで、稲富先生の話から一旦離れ、日本の大学公開講座の置かれた状況について整理しておこう⁴⁾。稲富先生が香川大学に着任した1960年代末から公開講座が開始された1980年代半ばまでの間に、日本の大学には「開かれた大学」と生涯学習という言葉で特徴づけられる動きが生じたのである。

(1) 「開かれた大学」

年)と述べている。

「開かれた大学」という言葉は、誰に対して、何のために「開かれた大学」であるかという点を考慮しながら慎重に用いる必要があるが、ここではその点には深入りしないこととして、ひとまず、「象牙の塔」という言葉で象徴される「閉じた大学」に対するアンチテーゼとして使われ始めた言葉であることを確認しておこう。一部の人のみが学べる大学ではなく、多様なバックグラウンドを持った人が、多様な形態で学べるようにする、そのためのスローガンとして使われた。「多様な形態」とは、正課の開放を進めるための夜間制あるいは昼夜開講制、通信制、放送制のほか、正規の課程外で実施される公開講座もその一つであった。

そもそも「公開講座」の法制化は、1947 (昭和 22) 年 3 月 31 日の学校教育法制定によって「第五章 大学」に「第 69 条 大学においては、公開講座の施設を設けることができる」という条文が設けられたことによる(当時、現在は 107 条)。前年 1946 (昭和 21) 年 3 月 31 日に連合国軍最高司令官マッカーサーに提出された『米国教育

使節団報告書』にも、成人教育の振興のために大学が公開講座を開くことについて記されてあった。しかし、それは前途多難なものであった。

文部省に戦後復活した社会教育局は、戦前、直轄学校(現在の国立大学の前身校)に委嘱・実施していた成人教育講座の後身として大学開放講座(文化講座、専門講座、夏期講座:1949年社会教育法により条文化)を推進しようとしたが、緊縮財政の影響からその動きは急激に衰退してしまった。一方、大学を所管する大学学術局においては、教育職員免許法および関連法が整備され、教員の新旧免許状切り替えという課題に応じる必要が生じたことから、1950(昭和25)年以降、教員養成学部・課程を持つ各国立大学において公開講座「現職教育講座」が実施された。GHQ/CIEと文部省の共同による教育指導者講習(IFEL)には「公開講座」の科目も開設され(講師は東イリノイ州立カレッジのエクステンション・ディレクターBryan Heise)、新制大学における公開講座のあるべき姿が示された。しかしながら、新旧免許状切り替えが一段落つくとこちらも低調なものとなってしまった。こうして、社会教育局と大学学術局、いずれも公開講座施策は衰退し、昭和30年代には公開講座そのものの数が僅かとなってしまった。

状況に変化が見られるようになったのは、1964 (昭和 39) 年に社会教育審議会答申「大学開放の促進について」が出されてからである。1969 (昭和 44) 年頃をピークとする大学紛争時には、当面する紛争への対処とともに様々な大学改革が唱えられた。そこでキーワードとなったのが「開かれた大学」である。中央教育審議会答申「当面する大学教育の課題に対応するための方策について」(1969 年)では、「開かれた大学」について、「それは個人と社会の教育に対する要請に即応できる大学であり、社会からの批判とその建設的な協力に道を開いた大学であり、公費の大幅な支援を受けるとともに学問研究を通じて社会に奉仕する大学である」と述べられた。さらに、2 年後の中教審答申「今後における学校教育の総合的な拡充整備のための基本的施策について」(1971 年)では、高等教育は中等教育から引き続いて進学する者のための教育であるという考え方を改め、広く国民一般に対して開放し、学習の意欲や必要が生じたときは適時勉学できるものとしなければならないとして、「開かれた大学」についてより具体的に論じられた5)。

国立大学協会大学運営協議会も、大学問題に関し立て続けに出した報告書のうち、3番目の「大学改革に関する調査研究報告書」(1973年12月)では、大学教育の開放を「大学の使命」とした。同報告書刊行に先立ち、1973(昭和48)年4月に誕生したのが、東北大学教育学部附属施設として設置された大学教育開放センターである。1976(昭和51)年には金沢大学に、そして1978(昭和53)年には香川大学にも、大学教育開放センターが置かれた(後二者は学内共同教育研究施設として設置)。

さらに、公開講座にかかる経費について、文部省委嘱という形ではなく、あらかじ

Japan Organization for the Promotion of University Extension

め大学予算のなかに組み込んで大学が自主的に計画をつくることができるよう国大協報告書が訴えたことを受け、1976 (昭和51)年には大学教育費そのものの中に公開講座が予算化された。かくして、大学局は国立大学の公開講座開設に必要な経費を計上しはじめ(以前は社会教育局)、5年間で予算額はほぼ倍増した(この時期、私立大学にも特別補助という形で公開講座開設に必要な経費の一部を補助する措置が講ぜられはじめている)。その結果、公開講座の実施大学数、開設講座数とも著しく増加することとなった。

(2) 生涯学習

このような「開かれた大学」の背景に、世界的動向となりつつあった生涯教育(生涯学習)という考え方があった。1965(昭和40)年、ユネスコの成人教育推進国際委員会においてポール・ラングランが提唱した生涯教育は、急激に変化する社会においては人生初期の学校での教育だけでは不十分であって、社会に存在している教育的機能を有機的に統合しつつ、生まれてから死ぬまでの生涯にわたる学習・教育の権利を保証すべきであるとする考え方を提示した。

生涯教育の考え方は国際的な共通理解となり、日本にもただちに紹介された。社教審答申「急激な社会構造の変化に対処する社会教育のあり方について」(1971年)は、生涯教育の観点から社会教育を再構成する必要性を謳ったものであったが、昭和50年代に入ると、社会教育の領域のみならず、教育全体において生涯教育・生涯学習の考え方が浸透することとなった。1981(昭和56)年には中央教育審議会答申「生涯教育について」が出され、さらに1984(昭和59)年首相直属に設置された臨時教育審議会は、1985~1987(昭和60~62)年にかけて「教育改革に関する答申(第1次~第4次)」を提出した。これら審議会の議論を通して、学歴社会の弊害の是正、情報化・国際化の進展、あるいは国民の生活水準の上昇、高学歴化、自由時間の増大などを背景に、「生涯学習体系への移行」が21世紀へ向けての教育施策の重要な柱となった。

そして、1990(平成 2)年の中央教育審議会答申「生涯学習の基盤整備について」が大学・短大等における「生涯学習センター」設置を提言したことにより、各地の大学にセンターの新設が続いた。1991(平成 3)年以降、1年におおよそ 2 つの国立大学に「生涯学習センター」(実際の名称は「生涯学習教育研究センター」等)が設置され続け、昭和 50 年代以降拡大の一途を辿っていた大学公開講座は、さらなる拡大期を迎えたのである。数値を挙げれば、1979(昭和 54)年度の国公私立大学で開設された公開講座数は 201 大学 1,181 講座、受講者数は 113,462 人であったが、13 年後の1992(平成 4)年度には 339 大学 3,933 講座、509,900 人となり、さらに 22 年後の2014(平成 26)年度には 707 大学 31,290 講座、1,387,292 人となった。35 年間で大

学数 3.5 倍、講座数 26.5 倍、受講者数 12.2 倍となっている 6)。

ここまでまとめてきたとおり、稲富先生が香川大学に着任し、二度の英国留学を経て、公開講座を開始するまでの約 20 年間に、日本の大学は「開かれた大学」を理念として掲げるようになり、かつ香川大学には全国の国立大学に先駆けて大学教育開放センターも設置された。そして、先生の講座が毎年開講の軌道に乗りはじめた昭和末・平成初めの時期は、日本全体で大学公開講座の拡大トレンド期にあったのである。

4. 稲富先生の公開講座~何を語ったのか~

ここからは稲富先生の公開講座が具体的にどのようなものであったかを、稲富先生が語った言葉と、受講生の声、双方から探ってみたい。大学でどのような公開講座が開かれているかは丹念に調べればわかるだろうが、大学公開講座の実像、あるいは成果や効果を明らかにするのは、実のところなかなか難しい。講師側・受講者側の資料がまとまったものとして残りにくいためである。幸いにして稲富先生の講座については、完全とは言い難いものの、ある程度稲富先生が公開講座について語った文章が残っており、また、複数の受講者による講座の感想等も残っている。そこで、稲富先生の言葉と受講者の声とを照らし合わせながら、公開講座の実像を明らかにすることを試みようと思う。

(1) 公開講座の全記録

まずは、稲富先生が担当した講座の全体像を確認しておこう (表1)。

タイトル一覧を眺めてわかるとおり、28年間のうち講座タイトルに「シェイクスピア」が入っていなかったのは、1991(平成3)年度から 1994(平成6)年度までのわずか 4 回である。「稲富先生の公開講座と言えば、シェイクスピア」と言われるゆえんである。

公開講座は、おおむね、5月にはじまり翌年3月まで、年10回、月1回決まった曜日に行われていた(例えば、第4月曜日)。例外は、講座が始まった当初2年間と、稲富先生が香川県立保健医療大学に勤めていた時期(前期授業期間中はスケジュール上難しかった)である。受講生は月1回定期的に香川大学のキャンパスに通うという、緩やかなペースで行われる講座であった7)。

平成22年5月31日~平成23年3月14日(全10回)

平成23年5月30日~平成24年3月12日(全10回)

平成24年5月28日~平成25年3月11日(全10回)

38名

44名

43名

年度	講座タイトル	期間	受講者数
1985(昭和60)年度	四大悲劇に見るシェイクスピアの人生観	昭和61年1月20日~昭和61年3月24日(全10回)	73名
1986(昭和61)年度	中期の劇に見るシェイクスピアの恋愛観	昭和61年6月3日~昭和61年9月2日(全7回)	47名
1987(昭和62)年度	後期の劇に見るシェイクスピアの人間観	昭和62年5月12日~昭和63年3月1日(全10回)	68名
1988(昭和63)年度	英国歴史劇に見るシェイクスピアの人間観	昭和63年5月10日~平成元年3月7日(全10回)	53名
1989(平成元)年度	シェイクスピアの人生観	平成元年5月16日~平成2年3月13日(全10回)	74名
1990(平成2)年度	シェイクスピアの『ソネット集』講読	平成2年5月29日~平成3年3月26日(全10回)	65名
1991(平成3)年度	新旧約聖書の全体像	平成3年5月28日~平成4年3月31日(全10回)	66名
1992(平成4)年度	旧新約聖書の全体像	平成4年5月26日~平成5年3月30日(全10回)	51名
1993(平成5)年度	イギリス・ロマン派の詩 ワーズワス講読	平成5年5月25日~平成6年3月29日(全10回)	41名
1994(平成6)年度	イギリス・ロマン派の詩 キーツ講読	平成6年5月31日~平成7年3月28日(全10回)	29名
1995(平成7)年度	シェイクスピア喜劇の世界	平成7年5月29日~平成8年3月11日(全10回)	55名
1996(平成8)年度	シェイクスピア悲劇の世界	平成8年5月27日~平成9年3月31日(全10回)	70名
1997(平成9)年度	シェイクスピアの暗い喜劇とロマンス劇	平成9年5月28日~平成10年3月18日(全10回)	39名
1998(平成10)年度	シェイクスピア歴史劇	平成10年5月25日~平成11年3月29日(全10回)	62名
1999(平成11)年度	シェイクスピア喜劇の愉しみ	平成11年5月24日~平成12年3月13日(全10回)	62名
2000(平成12)年度	シェイクスピア悲劇の面白さ	平成12年5月29日~平成13年3月26日(全10回)	53名
2001(平成13)年度	シェイクスピア悲劇とロマンス劇の愉しみ	平成13年5月28日~平成14年3月25日(全10回)	46名
2002(平成14)年度	シェイクスピア悲劇の面白さ	平成14年5月27日~平成15年2月24日(全10回)	48名
	ー『リア王』と『ハムレット』ー		
2003(平成15)年度	シェイクスピア英国歴史劇の面白さ 小四部作	平成15年5月26日~平成16年2月23日(全10回)	41名
2004(平成16)年度	シェイクスピア英国歴史劇の面白さ 大四部作	平成16年6月28日~平成17年3月28日(全10回)	40名
2005(平成17)年度	シェイクスピアの初期ロマンティック・コメディの愉しみ	平成17年8月8日~平成18年3月27日(全10回)	39名
	ー人間の愚を映す鏡ー		
2006(平成18)年度	シェイクスピア悲劇の愉しみ(1)	平成18年8月7日~平成19年3月26日(全10回)	37名
	ー塵に過ぎない人間の本質ー		
2007(平成19)年度	シェイクスピア悲劇の愉しみ (2)	平成19年8月6日~平成20年3月24日(全10回)	36名
	一忘恩に対する憎悪ー		
2008(平成20)年度	シェイクスピア喜劇の愉しみ(2)	平成20年5月26日~平成21年3月30日(全10回)	36名
	ー多様な愛の試金石ー		
2009(平成21)年度	シェイクスピア喜劇の愉しみ(3)	平成21年5月25日~平成22年3月15日(全10回)	39名
	一新しく造られた人のように一		

シェイクスピア ロマンス劇の愉しみ

ー「我々は夢と同じもので出来ている。」ー シェイクスピア英国歴史劇の面白さ(1)『ヘンリー6世』

ー地面に座って王達の悲しい死について語ろうー シェイクスピア英国歴史劇の面白さ(2)

-地面に座って王達の悲しい死について語ろう-

2010(平成22)年度

2011(平成23)年度

2012(平成24)年度

表 1. 稲富健一郎先生公開講座一覧(1985~2012年)

表には載せていないが、公開講座は 10:00~12:00 の 2 時間で行われることが多かった。初期の頃は午後や夜間の時間帯に開講されたこともあるが、1998 (平成 10) 年度以降は一貫して午前中 2 時間であった。そして、公開講座が終った後に開催される昼食会が、もう一つの目玉であった。昼食会は、長年稲富先生の公開講座の受講生だった蓮井廸子氏の話によると、稲富先生の発案で始まったものということである。はっきりといつ始まったかは不明とのことであるが(大学にも記録は残っていない)、2000 (平成 12) 年に生涯学習教育研究センターが法・経キャンパス(幸町 2 丁目)から教育キャンパス(幸町 1 丁目)に移転する前から行われていたとのことであり、開講時間帯が午後や夜間だった時期は分からないものの、1998 (平成 10) 年度午前で確定して以降は継続したのではないかと推測される。講義室は原則飲食禁止だったそ

うだが、稲富先生が事務を説得して、実現したものであったという。

28 年間の受講者数の推移を見ると、一番多かったのは 1989 (平成元) 年「シェイクスピアの人生観」の 74 名、一番少なかったのは 1994 (平成 6) 年「イギリス・ロマン派の詩 キーツ講読」で 29 名、年平均受講者数は 49.8 名であった。稲富先生のもともとの研究テーマだったキーツを扱った年度が最少だったのは、皮肉と言うべきか。 21 世紀に入ってからは平均受講者数を上回って 50 名を超えることは一度もなかったが、それでもコンスタントに 30 人後半から 40 人台の受講者を集めていたことは、特筆に値する。

(2) 公開講座の内容①:シェイクスピアの個性~Negative Capability~

それでは、稲富先生は公開講座で何を語ったのだろうか。それは、稲富先生がシェイクスピアのどこに惹かれ、シェイクスピアの何を語ったのかということに通じる。

稲富先生が長年公開講座を続けられた要因はモーリー・コレッジの経験等いくつかあるが、講座の題材がシェイクスピアだったからということも主要な一つとして挙げられる。実際、「もしシェイクスピア以外の文学者を取り上げていたら、これ程長期に渡って、講座を続けることは不可能であっただろう」し、「他の作家であったら、単年度で終っていただろう」と先生自身が述べている。なぜなら、「シェイクスピアについては、死後 400 年経過した今でも、洋の東西を問わず、毎年 4000 冊もの研究書が発行され、各国、各地でますます盛んに上演され、あらゆる芸術、学問の分野に霊感を与え続けている。シェイクスピアだけが、このような巨大な普遍性を持ち、広範囲に、長期間にわたる深い影響を人類の歴史に与え続けることができた」(以上、I、p.30;2008 年)からである。

ただし、先生は最初からシェイクスピアを研究対象としていたわけではない。2で述べたように、もともとはキーツ研究者であり、シェイクスピアについては「英文学と言えば誰でもシェイクスピアを口にするというような安易に思えた風潮に当時は反発して、その面白さを発見しようというような努力さえしたことがなかった」(叢書、p.i)という。

キーツがシェイクスピアを崇拝していたことから、稲富先生の関心もシェイクスピアに向かったことは前述のとおりである。シェイクスピアの魅力については、キーツの言葉を通して、次のように語っている。

キーツが言うには「シェイクスピアは個性を持っていない。」と言うんですよね。個性とか性格とか、そういうものを一切持っていない。Negative Capability、非常に難しい言葉ですが、要するに個性がないということを言っているわけです。それを繰り返し言っている。今でも言うし、シェイクスピアの批評にはしばしば

取り上げられるんだけども。個性がないっていうのはどういうことなんだろうと思うわけですね。逆に、ひょっとしたら個性が大きすぎてわからないのかもわからないですが。ルネサンスの時代っていうのは Uomo Universale (注: 万能の人)という普遍性、普遍的な人間。一芸に秀でるのではなく様々なものに能力を発揮する。そういう人間が理想とされていたので。レオナルドダビンチなんかもそうです。シェイクスピアもその一人ですね。今は個性、個性って、個性に閉じこもってしまって非常に狭い人間しかできない。小さな小型な人間しかできないっていうわけですが。シェイクスピアの時代は非常に巨大な人間が存在した。その一人がシェイクスピアだと思うんです。個性がないというのが非常に魅力ある点だろうと思うわけです(I、pp.27-28; 2008 年; 下線は山本による、以下同様)。

稲富先生は、一方で「(シェイクスピアは) 非常に広い個性を持っていた人間だと思うんですね。それがひとつ魅力だろうと思う」(同上) と述べており、一見すると正反対のことを述べているように思われる。しかしながら、「個性がない」とは、「一つの個性だけでは語れないほどの巨人である」ということを意味している。定年退官時には「シェイクスピアも一つの宇宙である。今定年にあたって、恥ずかしい話であるが、未だシェイクスピア研究の出発点にも達していないような気がしている」(稲富健一郎「感謝の言葉―退官に際して」、論文集、p.2) と自らの思いを吐露している。

(3) 公開講座の内容②:死生観~memento mori~

稲富先生がシェイクスピアのどこに特に強い魅力を感じていたかと言えば、間違いなくその死生観にあっただろう。高校 2 年生の時に肺結核で入院していた時、「同じ病棟で毎日のように患者が手術を受け、死んでいっていたので、近い内に自分も死ぬであろうと思っており、死は身近に、身体の中にあった」(同上)と述べており、シェイクスピアの作品の持つ死の感覚、死の匂いというものが、稲富先生を惹きつけたのであろうと思われる。シェイクスピアの魅力について、Negative Capability に続き、次のように述べている。

もう一つは、シェイクスピアだけではないけれど、特にシェイクスピアは<u>いつ</u>も死というものを見つめていた。どんな作品でもどんなに面白い喜劇でも、後ろに死が感じられるということですね。これがとっても魅力になっているわけで、人間っていうのはどういうものか。死ってどういうものか。死を知らないと生が浮かび上がってこない。シェイクスピアのような強烈な生を楽しめたっていうのは、いつも死をその背後に感じていたからだと思うんですね。人生っていう実態がない。あってないようなもの。そういうものであるということをいつもシェイ

クスピアは背後に感じていたように思う。

3つ例を挙げると、ハムレットが墓場で頭蓋骨を持ちながら、「どんなにこの世で成功してもこういう風な頭蓋骨に最後はなるんだ。土から出て土にかえって、いずれは詰め物になったりワインの栓になったりするんだ。」という事を言った。もう一つはプロスペロー。最後の劇ですけど『あらし』の中で「人生夢である。夢のようなもので終わってしまう。何の実体もない。」という事を言っています。それからもう一つ『アントニーとクレオパトラ』この中でも「今姿があるけれど、これはいずれなくなる。水の中に水が入るように、いずれは消えてしまうんだ。」と。人間は実体がない。生というのはいずれなくなるっていうのはいつもシェイクスピアの背後にあって、それによって逆に命が強烈に浮かび上がってくる。逆に生が感じられる。そして生を楽しめるようになる。という、そこが一番の中心点かなと思われるんですが。まあだからこの世にしがみつくものはなにもない。非常に肩の荷が降りるということだろうと思うんですね(I、p.28;2008年)。

このことは稲富先生の発言には繰り返し出てくることである。そもそも、退官時の 論文集に稲富先生自身が書かれた論考のタイトルは「シェイクスピアに見られる死生 観」であった。その冒頭は次のように始まっている。

死は、自然に、偶発的に、自発的に生が終り、肉体が有機体から無機体へ変わることである。有と無はお互いを照らし合う。死がなければ生はない。生がなければ死もない。死を観ることは、生を観ることであり、生を観ることは、死を観ることに他ならない。従って、両者を分けることは不可能である。シェイクスピアは、死の向こう側からもこの世を観ていたように思われる。丁度観客が舞台を観るように、或いは、神がこの世を観るであろうように。そうすることによって、この世の全ての価値を相対化し、全ての人事を客観的に観じ、精神の完全な自由を得ることが可能になったのではないだろうか(稲富健一郎「シェイクスピアに見られる死生観」、論文集、p.9)。

「この世の全ての価値を相対化し」という点について稲富先生の言葉を用いて補足すれば、「モンテーニュが、「権力を持ち勝ち誇っている一人の皇帝の心臓も命も、一匹の卑しい小さな蛆虫の朝食に過ぎない。」と語っているように、死によって、人間社会の階層も秩序も否定され、社会の頂点にある王と底辺にいる乞食、英雄と道化との間に本質的な違いは無いということになる。死は、この世の諸々の価値を相対化し、絶対的な価値を剥奪する」ということである。「死は、国王も奴隷も、英雄も道化も、富者も貧者も、賢者も愚者も全ての者を平等にしてしまう」のである。だからこそ、

生きている間の諸々の権力や名声に執着しても、あるいは悲惨さを嘆いても仕方がないわけであるし、また死は必ず訪れるものであるがゆえに「やがて来る死の恐怖に怯えて生きている生者の方が哀れな存在である」(この段落内の引用はすべて、論文集、p.18)のである。

さらに、2008(平成 20)年9月 25日に高松市生涯学習センターで開催された「香川大学生涯学習教育研究センター30周年記念講演会&シンポジウム:知の循環型社会の構築に向けた香川大学の取り組み~生涯学習を通した社会貢献~」において、記念講演会の講師として登壇した際にも、再び同様のことを語っている。シェイクスピアの生きた前後の時代はペストや内乱(薔薇戦争、清教徒革命)によって死が身近であったことを説明しつつ、「memento mori (メメント・モリ、死すべきことを忘れるな)」と「カルペ・ディエム(carpe diem、一日一日をつかめ)」という二つのラテン語をもとに、「人間いずれは死ぬ、皆さんも永遠には生きられないわけで、(中略)その死ぬということをいつも感じるということ。死を感じることによって充実して生きる、一瞬一瞬を充分に生きる、2つはお互いに関連していると思うんです」(I、p.33)、「人間はすぐ死ぬ、いずれは死ぬんだ、早く死ぬ人がいたり、遅く死ぬ人がいたりするけれども、例外なく全員が死んでいくという、認識が背景にありまして、それ故に喜びとか満足がいかに重要であるかということが自ずと浮かび上がってくるんだろうと思いますね」(I、p.34)と述べている。

受講生の書いた追悼文には、次のようなものがある。

今、思い返しても、シェイクスピア文学を通して、私たちの存在そのものに問いかける先生の語り口は、悠揚として、何人をも惹きつけるものであったと思います。そして、先生のシェイクスピアの講義には、しょっちゅう『メメント・モリ』(死を思え)が、重奏低音のように流れていたと思います(II、p.4)。

中々先生の死を受け入れることが出来ませんでしたが、ある日、ふっと思いました。先生は「最終講義」をきっちり務められ、旅立たれたのだと。<u>先生の人生全てをかけて。シェイクスピアのテーマのひとつ「死」ということについて、よ</u>く解説してくださいました(II、p.30)。

(4) 公開講座の内容③:人生は舞台、劇を見る意義~生き方を学ぶ~

シェイクスピアの作品はその多くが戯曲である。シェイクスピアにならい、人生を 舞台にたとえることも、稲富先生の口癖であった。先生自身が、大学教授としての顔 とは別に、舞台に立って歌い演じるという顔を持つ人であったがゆえに、知識として というよりは実感として持っていたことでもあっただろう。 もう一つそれと関連して、「人生は舞台である。男も女もみんな俳優だ。役者だ。」っていう言葉がありますけれども、"As You Like It"(注:『お気に召すまま』)の中で言われるセリフですが舞台っていうのは本当の物じゃない。実人生と違うものである。この世が実人生とは違うんだっていうのはちょっと不思議な気がするんだけど、我々は今こうやってやってるけれどこれを一つの劇だと思ったり、劇の 1 コマだと思ったら面白くなるわけですよ。面白くなるし、真剣になれる。不思議なもので。舞台というものは非常に不思議なもので、嘘だからいい加減にやるかっていったらそうじゃなくて、嘘でも必死にやる。そこが人生の一番の楽しみだろうと。シェイクスピアが人生は舞台であると言ったことの一番の妙味はそこにあるんじゃないかと僕は思ってるんですけど(I、p.28; 2008 年)。

また別のところでは、「毎日の身近な一つ一つの経験を、これは舞台の上の出来事だと思い、自分はそれを演じているのだと思えるようになったら、人生はどのように見えてくるだろうか」(I、p.30;2008年)と述べている。どれほど辛い、苦しいできごとであっても、演じているにすぎないと思えることができれば、少しは楽になれるのではないだろうか。

それとともに、劇を見ることの意義について、次のように語っている。

劇っていうのはどういう作用があるかということなんですが、シェイクスピア自身が『ジュリアス・シーザー』の中で言っているんだけど、人間の顔・形は鏡で映せますよね。朝起きて顔を見たり、表情悪いとか顔色悪いとか。外のことはわかるけど精神をどうやって映すか。自分の心の中をどうやって鏡に映すか。精神の鏡となるのが劇だと言っているんですよ、シェイクスピアは。外面は鏡で映せるけど、内面は鏡じゃ映せない。劇を見ることによって、自分というのを映して見れるんだと。それは本当だと思うんです。劇の良さ、面白さっていうのは、自分を知る。劇を見ることによって自分がはっきりと自分に意識できる(I、p.29; 2008 年)。

稲富先生の公開講座は単にシェイクスピア作品を講読するというにとどまらず、人 生そのものを学ぶことであったということを、多くの受講生が回顧している。

シェイクスピアで学んだ事は実生活に重なり、気のきいた台詞という事に止まらず、生き方に大いに役立ちました(II、p.11)。

考えてみれば、稲富先生は物事の一番大事な根っこの部分、それは「思想」と呼べるものだと思いますが、それを各方面に植え付けて下さった方だと思います。 その道しるべを頼りに人生を歩んでいるのは私だけではないと感じています (II、p.15)。

(5) 稲富先生のまとう「軽やかさ」

稲富先生は「メメント・モリ」を語り、絶えず受講生に死を意識させるのであるが、 その語り口は決して暗いものではなく、逆に、死すべき存在であることを諦観したか らこその「軽やかさ」があった。とりわけ、学問や芸術に向き合う態度については、 しばしば次のようなことを述べていた。

学問や芸術は、本来とても面白いものだと思う。<u>刻苦勉励して蓄積していくようなものではない。大事なことだから記憶しておこう等と努力しない方がよい。</u>忘れるものは、それが大したことでないという証拠だから、直ぐ忘れたっていいし、納得がいかないことを無理して納得することもない。嫌な面を好きになろうとすることもない(I、p.22; 1999 年)。

学問も芸術も、本来とても面白いものではなかろうか。刻苦勉励し、大事なことを全て記憶しておこうと身構えない方がよいだろう。 <u>忘れるものは、それが大したことでないという証拠だから、直ぐ忘れたら良いかも知れない</u> (I、p.30; 2008 年)。

その上で、稲富先生の伝えるメッセージは、いつも「人生を楽しみ、軽やかに生きること」に至るのであった。

特に喜劇の中では、シェイクスピアは全てを楽しむことの大切さを強調している。彼と共に我々も、この講座を通して、現在のこの場を全て受容し、満足し、生きることを楽しんできた。 これまでに多くの受講生の方々から、シェイクスピアを知って、肩が軽くなったという感想を寄せられたが、講座を担当している者にとって、これ程報われる言葉はないのではないか。 有り難いことである。これまでの長い月日の流れの中で、シェイクスピアに触発されて、各々の様々な人生経験について語り合いながら、理解を深めてきた。これからも、この短い人生を歩みながら、心を写し出すシェイクスピア劇によって、受講生の方々とともに自分を知り、自分の生き方を知ることにより、肩の重荷を降ろし、軽やかに生きていきたいと願う (同上)。

実際に、多くの受講生が稲富先生の公開講座を通して「生きるのが楽になった」「楽 しくなった」と振り返っている。

それぞれの作品を通して、人間のさまざまな生き方、心の葛藤、私にはすべてが新鮮で、私の知らない世界でした。特に私に残っている言葉に、お気に召すままの「人生はまわり舞台のようなもの」、マクベスの「人生は影法師」と言う言葉があります。 この言葉を知ってからの私の人生観は、なぜか自分でもわからない程、気楽になり、楽しくなった事を思い出します。 これも先生の講義をほとんど休むことなく出席出来たからと思います (II、p.6)。

講座が始まった頃は高度成長期の(山本注:バブル期の間違いか?)国中が浮かれていた時期で、何かおかしいと感じながら風潮に流される世相だったように思い出されます。そんな中、シェイクスピアの作品に触れ、稲富先生があらかじめ作品の中からピックアップされた台詞や詩のプリントをとおして、数々の名言に、心の拠り所や胸のつかえがスッと引く様な感覚をしばしば味わったものです。もしこの講座に縁がなかったなら、今の自分とどの様にちがっていたかと想像できない程、みのり多き講座でした(II、p.9)。

5. 公開講座の持つ力

前節では、稲富先生が公開講座で語ったことを見てきたが、ここからは稲富先生および受講生が「公開講座」というものをどのように認識していたのかについて検討してみよう。

(1)参加を強制できないがゆえの緊迫感

稲富先生日く、正課の授業との大きな違いは、公開講座の受講生には権威(単位)で参加を強制することができないことであるという。

担当者にとって一番辛い点は、開放講座に来ていただいている方々を、学生のように単位で縛ることはできないことである。これは実に辛い。センターは権威というものが全く通用しない所である。従って、面白くなければ、次の講座に来ていただけない。シェイクスピアも400年前そんな辛い気持で劇を一つ一つ書いていったのだろうと思うのである。しかしそうした辛い気持も、報われたと感じたのは、シェイクスピアの講座を聞いて下さった数人の方から、生きることが楽

になったと聞いて、シェイクスピアが少しでも伝わったのだと感じた時である。 普段生きることに何らかの影響を与えない文学研究は無意味であると私はいつ も考えていたからである。とにかくセンターに於けるそうした緊迫感は、人生経 験の少ない学部の学生の授業にはないものであって、特に文学を人生経験の豊か な方々と6年間もの長い間研究することが出来たことに感謝している次第である (I、p.19; 1991年)。

私は普段は大学生を教えているのだけれど、センターでの講義と大学での授業の相違点を考えてみると、第一は彼らに出席し注意深く聞くように強制することができるのである。彼らは単位をとらなければならないから、仕方なしに詩の授業に出てくる。しかし、センターの受講生の方々には強制することができない。全ては自由意思によっている。この講座のために受講料を払い、ある人々は遠い所から時間と交通費を使って来ておられる。多くの方々は、私が講座を担当し始めてから 10 年近くずっと出席して下さっている。その熱意に私は動かされるのである(I、pp.20-21; 1994 年)。

公開講座を受けるか否か、先生の話を聞くか否かということは全くの自由意思である以上、彼らの期待に応えるための緊迫感は正課の授業の比ではないというのである。

(2) 学ぶことの喜び~生涯学習の一側面~

公開講座は緊迫感のあるものだと言う一方で、正規の学生たち、ひいては日本人の 学問への向き合い方については大いに不満を持っていた。

日本では、大学に行くことは、良い就職をするための手段であると一般的に考えられている。現実を見ると、それを否定することはできない。従って、学問することは目的ではないからどうでもよいことであって、如何に大学での苦痛を味わわないで楽をして卒業するかが問題となる。殆どの人は、大学を卒業し、就職してその目的を達成する事ができると、学問や芸術から死ぬまで完全に離れてしまう。しかし、良い職に就くことができて、それからどうするのかと尋ねたくなる。何かおかしい。その後が問題だ。他方、英国では興味があれば、人々は一生楽しむことを止めないし、何歳になっても、新しい分野に興味を持てば、それを楽しむうとして挑戦する。そしてそこで新しい友情が芽生える。(中略)極端に単純化して、学問、芸術を金儲けや就職の手段としか考えない国民と、モーリー・コレッジが象徴しているように、それをそれ自体として一生楽しもうとする国民の差は、一体何処から来るのであろうか(I、p.22; 1999 年)。

「学問それ自体を楽しむ」ということについては、先にも述べた 2008 (平成 20) 年のセンター30 周年記念講演会において、よりはっきりと述べている。

生涯学習というのは、結論になりますが、就職とか資格取得とか何か目的があってそれに向かって学習するというのではなくて、その学習自体が目的になる、学習自体に満足と喜びを感じられる、そういうものであって欲しいし、そういうふうになるように努力を 24 年間続けてきたつもりですけれども、成功したかどうかちょっとよく分かりません(I、p.37; 2008 年)。

ここ数年来「リカレント教育」という言葉が大学を席巻している。2017(平成29)年9月に第3次安倍内閣(第3次改造内閣)が設置した人生100年時代構想会議が、翌年6月に公表した「人づくり革命基本構想」は、「より長いスパンで個々人の人生の再設計が可能となる社会を実現するため、何歳になっても学び直し、職場復帰、転職が可能となるリカレント教育を抜本的に拡充する」と述べている。このような「職場復帰、転職」を視野に入れた学習は必要ではあるが、それだけが人生100年時代の学びではない。

稲富先生の説く生涯学習は、決して職業に直結するような学びではない。しかしながら「大学は、学術の中心として、高い教養と専門的能力を培う」(教育基本法第7条) ことを目的とする学びの場である。

シェイクスピアという古典を題材に「学ぶことそれ自体の楽しみ」を説いた稲富先 生は、いわば現代のヒューマニスト(人文主義者)であった。

(3) 大学で過ごす時間の貴重さと、学びを継続すること

稲富先生が香川大学を定年退官した後の話になるが、1947 (昭和 22) 年に制定された教育基本法が 60 年ぶりに全部改正され、2006 (平成 18) 年に新しい教育基本法が制定された。その時新たに付け加わった条文の一つが第 3 条「生涯学習の理念」である。同条には「国民一人一人が、自己の人格を磨き、豊かな人生を送ることができるよう、その生涯にわたって、あらゆる機会に、あらゆる場所において学習することができ、その成果を適切に生かすことのできる社会の実現が図られなければならない。」とある。実際、社会全体を見渡せば学びの場は多く提供されるようになっている。しかしながら、成人が学校卒業後に学ぶ時間を確保することは容易なことではない。

それゆえ、その時間を確保して大学に通い学ぶことは、大きな喜びをもたらすのであろう。そのことは、受講生の声によく表れている。

先生が英国留学中にモーリーコレッジでの講座を心から楽しまれた。とありますが、モーリーコレッジのあり方、方法をご自分の大学で実現していただけたことは、当時、私のように子育てに明け暮れ、まともに人と会話する機会が無く、生活に新しい空気を求めつつも叶わず暮らしていた者にとっては、わが意を得たりで、迷うことなく受講の申し込みをしました。人生に付きものの不意の出来事、成り行きに中断しながらも子育て真っ只中に、大学という聖域でのシェイクスピアの講座は、日常からワープさせてくれる、願ってもない時間でした(II、p.8)。

シェイクスピアは戯曲であり、あのもってまわった長台詞を理解しつつ、一人で読むのは、私にはなかなか骨の折れることでした。先生がピックアップされた解説に従って読み進み、後には映像でも楽しんだおかげで長く続けられたと思います。 二十何年前のあの頃は、子育てや家庭の事で、自分を見失しないながらの日々に、大学で自分の楽しみだけに学ぶという事は大きな喜びであり、慰めでした(Π 、p.10)。

夫の定年後にご縁あって、平成9年4月、岡山から高松へ移り住みました。高松在住中で一番得た宝物、それが稲富先生の講座と講座生の方々の活発で率直な発言力でした。私にとって、それまでの十数年は両親4人の介護と看取り、それと娘の3人の子供の出産が重なった日々でした。それがやっと一息ついた年からの受講でしたので、ひとつひとつの言葉が身に浸みわたり、「これぞ生涯学習だ」と良い時期によい講座に恵まれたことを感謝しました(II、p.18)。

上記の受講生はいずれも、人生において生じるあれこれを経たのちに、あるいはその合間にようやく学ぶ時間を確保することができた方々である。だからこそであろう、大学で過ごす時間の豊かさを存分に感じていることが、ひしひしと伝わってくる。

しかし、単に学びの時間をある時確保したというだけにとどまらない。それを長年 にわたって継続した受講生たちが多くいたということが、稲富先生の公開講座の特徴 である。

多くが高校卒業後ただちに入学する日本の大学は、4年間(医学部等一部は6年間)で卒業することが前提とされる。大学院に進学したとしてもせいぜい 10年程度であるう。そのような中、「皆勤賞」の人は28年間香川大学のキャンパスに通い続けたことになる。一体全体、何が彼らをそうさせたのだろうか。

先生は、まさに「生涯学習」の何たるかを身をもって示された方だと思います。 長い年月を経て、その想いは私達の中にも、次第にしみ通り、年を重ねれば重ね Japan Organization for the Promotion of University Extension

る程、今まで見えなかったものが、少しずつ見えるようになりました。シェイクスピアの言葉の一つひとつが、宝物のように胸に響く事もあります。先生からのかけがえのない贈物のように思えてなりません(Ⅱ、p.28)。

次から次へと新しい知識が生み出される現代において、多くの作品を生み出したシェイクスピアを主な題材としていたとはいえ、長年にわたり同一テーマを学び続けるというのは贅沢な営みである。しかしながら、年を重ねることで深く理解することができるということも事実であろう。ある種の宗教的な、聖句の学びに近いものを感じないこともない。

友達から誘われ、軽い気持で受講した講座でしたのに、24 年間出席させていただきました。 先生の講義で年を重ねても、学ぶよろこびを感じる事が出来、いつも充ち足りた気持で帰宅したものです(II、p.30)。

長年受講している人に、飽きさせることなく、年を重ねても学ぶよろこびを感じさせることができるというのは、教える側に深い学識の裏付けがなければできないことである。この公開講座は極めて「属人的」なものであって、稲富先生だからこそできたことであり、誰もが真似できることではないのかもしれない。

「私は老い果てるまで、稲富先生の許でずっと学び続けよう、それこそ「生涯学習」だと楽しんでおりました」(II、pp.4-5)、そのように受講生から慕われた稲富先生は、やはり特別な存在であったと言えるだろう。

(4) 受講生から学ぶ

しかし、学んでいた、学び続けていたのは受講生だけではなかった。かつて筆者は 稲富先生に「公開講座の極意」を伺ったことがある。帰ってきた言葉をセンターの NEWLETTER に掲載した時の文章が、以下のものである。

極意?そんなものはありませんよ。我々が大学で研究しているというのは、温室で栽培されているようなもので、外のことは分からない。教えるなんてとんでもない!講座に集まってこられる市民の方々に、自分の経験していないこと、思ってもみなかったようなことを学ぶことが主でした。シェイクスピアという主題が幸いしたとも言えますね。生きるとはどういうことかという問題を一緒に考える、そんなロンドンでの経験をもう一度高松で再現したい、その強い情熱に動かされているうちに、20年が夢のように過ぎていた(I、p.25; 2006年)。

受講生から学ぶ――これも、稲富先生の文章の中で何度も繰り返された言葉である。

「教えることは学ぶこと(To teach is to learn)」という諺がある。これは、教えるためには、自らが良く理解していなければならないから、勉強しなければならない、従って、結果として良く学ぶことになるということを、或いは、もっと直接的に教えるという行為は即学ぶという行為であるということを意味しているのであろう。しかし、講座では、私は別の意味でもこの諺を実感している。教えるという立場にありながら、実際には受講生の方々から多くを学んでいるのである。私はなるべく講義という形式をとらず、ワーズワスの詩を中心にして受講生の方々に自由に発言してもらうようにしている。世間話から、お喋りでもするような具合にである。こうしないと私としても大変に損をすることになるからである(I、p.20;1994 年)。

講座では受講生の方々の様々な人生経験を伺うことができる。発言の中で直接そうした経験に触れられなくとも、詩についての感想や解釈の中ににじみ出てくるものである。特に文学に於いては、類似の体験をしていることが作品を理解するうえで重要になってくる。(中略)受講生の一人である村川節彦氏から、太平洋戦争中にある夜、軍艦が撃沈され、海に投げ出されて泳いだという、死の一歩手前といった衝撃的な経験が生々しく語られた。このように受講生の方々から文学や芸術についての率直な感想や人生における様々な体験談を拝聴し、そこから学ぶことが、私の密かな喜びとなってきているのである(I、p.21;1994年)。

(5) 昼食会と社交の重要さ

稲富先生が受講生から学ぶことが多いと言っていたのは、恒例行事となっていた昼食会の場でのことであった。先生は、ともに学ぶ仲間、友だちの大切さを繰り返し説いていた。昼食会は先生と受講生、受講生同士の交流を促すものであった。

稲富先生は次のように述べている。

これもモーリー・コレッジの経験が底辺にあるんですけど、そこに集まってきた人の横の繋がりによって、色んな会話からその人を理解できるし、いろんな人から得るものが多いので、<u>横の繋がりを大事にしたい</u>なと思ってやっていきました。そのひとつの試みとして、毎回昼食会を開いているんですけど、昼食会を開いて、別にシェイクスピアだけに限らず色んな日常生活に感じたこととか、あるいは美術館に行ったこととか、様々なことが話題に出てきて、それとシェイクスピアが繋がってくる場合が多いんです。そういうことで理解が深まってくるとい

うことで文学というのは実人生と非常に密接に関係があるものですから、そういう点でいい集まりだと思っています(I、p.27;2008年)。

シェイクスピアが言っているように、人生は一つの夢のように短い。だから楽しまなくては。単位や就職と無関係に学問や芸術を楽しんでいる間に、良い友が沢山できる。友ができると、その楽しさも倍加する。シェイクスピアのように歴史に生き残ってきたものは、全ての国民や階層や時代に面白いと感じさせるものを持っている(I、p.22; 1999年)。

同様に、受講生も次のように語っている。

また、講座の後の食事会は<u>私たち受講生の溜まり場</u>のようでした。文学の師であるだけでなく、人生の師でもあった先生は、私達の取り留めのない話をじっと聞いておられたのですが、先生に聞いていただくと何故か、自分が昇華されるように思われたものでした(II、p.5)。

稲富健一郎先生の人間性と美しい言葉、そして上品な声にひかれて時間を楽しませていただきました。とりわけ<u>聴講生の素敵なお仲間とすっかり仲良くなり、</u>一段と楽しい時間を持てたことを、私の心の財産にいたしました(II、p.2)。

モーリー・コレッジが社交ということを大事にしていたように(補遺参照)、稲富先生も公開講座そのものだけでなく、講座後の交流を重視していた。それが受講生の公開講座を通しての仲間づくりに繋がった。このことも稲富先生の功績の一つに挙げられよう。

(6) センターの望ましい姿

以上を踏まえ、公開講座を開設するセンターの理想像について、次のように語っている。

これからも開放センターの講座がさらに充実し、さらに多くの方々が参加され、 夕方にも多くの講座が開講されて昼間働いておられる方々も参加でき、モーリー・コレッジのように食堂やバーが完備され、町のスナックに行かないでも、センターでワイングラスを傾けながら、文学、哲学、科学、芸術についてリラックスした雰囲気で、社会の様々な階層の人々が語り合えるようになる時がくることを期待している(I、p.19; 1991年)。 センターの第一の目的は、多くの人々にそれ(山本注:学問や芸術)を楽しんでもらえるように、案内役になることで、第二は、<u>そこに集まる人達の横の連携、</u>交流を深めることであろう。香川大学の我らのセンターがその様な場になること、それが、モーリー・コレッジでの充実した経験から生まれた私の夢である(I、pp.22-23; 1999 年)。

稲富先生が折に触れ「センターにバーを作ろうよ」と言われていたことを思い出す。 稲富先生にとって、学びは眉間にしわを寄せて行う、しかつめらしいものではなかっ た。ワイングラスを傾けながら気軽に楽しむものであった。それこそが、稲富先生が 英国のモーリー・コレッジで感じた一番大切なことであり、高松の地で実現したかっ たことであろう。

6. おわりに

本稿を終えるにあたり、受講生の語る稲富先生の人柄についても触れておきたい。

大学によって異なるだろうが、少なくとも香川大学では公開講座の担当はノルマではなかった。正課の授業や研究、学内運営の仕事とは別に、プラスアルファの業務を、香川大学在職中のみならず定年退官後も(受講生からの要望があったとはいえ)継続することは、情熱がなければ続かない。「平熱の情熱家」という表現は言い得て妙である。

西欧の人間教育についての考察も深められ、いち早く生涯学習の必要性を説いておられました。大学に当時から著名な小田島雄志先生をお招きしての講演会を企画したのもその一環でしたが、前例のない事への大学の壁は厚く「全ての責任は私が取るから」と実行委員会の受講生達を励まし、いつも楯になって下さったのが先生でした。他大学の学生も一般人も交えての開催の結果、このイベントは記録的な盛況ぶりで、人が溢れ大学の講堂が満杯になるほどでした(II、pp.14-15)。

小田島雄志先生の講演会というのは、1992 (平成4) 年5月23日に香川大学講堂

で開催された特別講演会「シェイクスピアの人間学」のことである。主催は「小田島雄志を囲む会」であり、公開講座受講生を中心に実行委員会が組まれ、実現したものである。参加人数約800名という記録が残っている8)。

次のようなエピソードもある。稲富先生と当該受講生との長年の信頼関係あっての発言であろうが、「ソフトな中にも、時にシニカルな発言をアクセントに」(II、p.9)という一面を垣間見ることができる。

終り頃の昼食会で、その日の講義にキーツの話が出たので、「今日はネガティブケイパビリティ(Negative Capability)という言葉が印象でした」と云うと、「どういう事か、皆に説明して下さい。」と、いたずらっぽい目でテストのように云われました。私の答えに「満点です。いつも寝てばかりいるのかと思ってましたが、聞くべきところはちゃんと聞いているんですね。」と ちゃかすようにほめて下さいました。それでもほめられると、この年でも嬉しく、今ではなつかしい思い出です(Π 、p.11)。

2013 (平成 25) 年度の公開講座も前年度同様にスケジュールが組まれ、あとは開講を待つばかりというある日、稲富先生が手術のために入院されることになった。講座開始時期はしばらく延期せざるを得なくなったものの、筆者がお見舞いに伺った時は、退院したら公開講座を実施すると仰っていた。

7月、術後の経過は良好であると伝えられていた稲富先生の容態が急変し、突然お亡くなりになった時、葬儀の場に一体全体何人が集まっただろうか。先生は公開講座を長年続けるだけでなく、2で述べたとおり、趣味の域を超えほぼプロレベルであった声楽の能力をいかして、コーロ・ヴェッキオ、コーロ・メルコレディ、市民オペラちえちいりあといった音楽団体の指導もされていた(個人的な話になるが、私も稲富先生の声楽のレッスンを受けていた)。そのため、とても多くの人が駆け付けたことを覚えている。出棺の際には、先生が大好きだったヴェルディのオペラ『ナブッコ』の「行け、わが想いよ、黄金の翼に乗って」を、すすり泣きしながら合唱して見送った。

鳥取で生まれ、広島で大学生活を送った後は、2 度の英国留学を除きずっと香川県で過ごされた稲富先生であるが、最期はこのように多くの人に囲まれたものであった。 今は天国で文学に親しみつつ、テノールの名曲の数々を思う存分歌われていることを 願っている。

「注]

1) 学校教育法第1条の大学ではないが、自治体が住民向けに開設している世田谷市民大学を例にとってみよう。「講師名一覧表(1981年度~2020年度)」を見ると、

武田晴人(東京大学、近現代日本経済史、1984~2020 年度のうち 28 年間)、間宮陽介(京都大学、経済理論・思想、1984~2020 年度のうち 23 年間)、米山光儀(慶應義塾大学、日本教育史、1987~2020 年度のうち 23 年間)、馬場康雄(東京大学、政治学、1981~2020 年度のうち 22 年間)、倉沢進(東京都立大学、都市社会学、1981~2008 年度のうち 22 年間)、吉見俊哉(東京大学、文化社会学、1988~2020年度のうち 21 年間)、浅子和美(一橋大学、マクロ経済学、1990~2020 年度のうち 21 年間)と、20 年以上関わった講師だけでも 7 名いる(カッコ内の大学名は主たる所属先)。探せば他にも各地に熱心な取組をしている大学教員はいるだろう。世田谷市民大学運営委員会『世田谷市民大学 40 年史』世田谷区生活文化政策部市民活動・生涯現役推進課、2021 年、pp.77-88。

- 2) その他、稲富先生の研究業績一覧については、論文集の pp.6-8 を参照されたい。
- 3) 種田亮乗「ご挨拶」、稲富健一郎先生追悼演奏会(2014年2月15日、四番丁コミュニティ・センター) パンフレット所収。
- 4)以下、この項の記述は拙稿「国立大学における大学拡張・大学開放の歴史的変遷 「生涯学習センター」の視点から一」『社会教育』No.867、2018 年 9 月、pp.12-17 に基づいている。詳細についてはこちらを参照されたい。
- 5) 本稿は公開講座を中心に述べているが、ここに挙げた中教審答申を受け、1970~80年代においては、公開講座が拡充するだけでなく、正課教育を開放するための取組がより積極的に進められた。すなわち、従来からある夜間学部、通信教育に加え、昼夜開講制や社会人特別選抜なども行われるようになり、放送を活用する高等教育機関である放送大学も設立された。
- 6) 1979 年度のデータは文部省大学局大学課「大学教育の改善等の状況について(昭和54年度大学公開講座の開設状況を含む)」(『大学資料』76・77合併号、p.3)、1992年度および2014年度のデータは「公開講座開設状況の変遷」(文部科学省委託調査『平成27年度開かれた大学づくりに関する調査研究調査報告書』平成28年3月、株式会社リベルタス・コンサルティング、p.21、https://www.mext.go.jp/a_menu/ikusei/chousa/__icsFiles/afieldfile/2016/11/22/1377544_001_1.pdf [2022.5.4])より。
- 7) 正課の授業が大学設置基準によって単位・時間数等が決められているのに対し、公開講座にはそのようなものが全く存在しないため、回数や時間数などは各大学で独自に設定されている。香川大学の場合、香川大学の教員が主で行う連続講座であること(単発の「講演会」ではないこと)ということが定められていたにすぎず、年間スケジュールについては担当教員の裁量で決められていた。少なくとも筆者が香川大学に在職していた頃、稲富先生のように年間通して実施する例は少なく、多くは2~3ヶ月、長くても半期、決められた曜日に毎週または隔週実

施するというものであった。

8) 「公開講座以外の事業」、香川大学生涯学習教育研究センター『三十年のあゆみ: 香川大学生涯学習教育研究センター30周年記念誌』2008年、p.106。

【補遺】モーリー・コレッジについて

1. 沿革

稲富先生が学んだモーリー・コレッジについて、少し補足しておきたい(2022 年 5 月現在、モーリー・コレッジ・ロンドン(Morley College London)が正式名称であるが、以下、モーリー・コレッジと記す)。

モーリー・コレッジ Web サイトの"Our History"冒頭には、「モーリー・コレッジはロンドンの多様なコミュニティに対して生涯教育の機会を提供することを目的に創設された。1889年、ウォータールーに設立されたコレッジは、英国における最も古くかつ最大の成人教育専門機関の一つである。2020年、16-18歳の若者を含む、ノース・ケンジントンおよびチェルシーのコミュニティへも拡大した」と記されている1)。

モーリー・コレッジの創設者は、芸術家、社会改良家、婦人参政権論者として知られているエマ・コンス (Emma Cons、1838-1912) ²⁾ である。Web サイトによれば、コンスは"無限の資源を持つ女性"と称され、「真のロンドンっ子 (a true Londoner)」であった。前向きで、オープンな心の持ち主であり、全ての人が良い生活 (good life) にアクセスできるようにという強い思いを持っていた。

コレッジの起源は、1882 年、ランベス(Lambeth)地区の人々の可能性向上のため、1880 年にコンスがマネジメントを引き継いだロイヤル・ヴィクトリア・ホール(Royal Victoria Hall または Royal Victoria Coffee and Music Hall、現在は The Old Vic $^{3)}$ として知られる)で、週1回のペニー・レクチャー(Penny Lectures)をはじめたことである。わずか1ペニーで、地区の労働者たちがコーヒーを飲みながら、電話の使用法、ロンドンの大気汚染、女性の権利などのトピックに関するディスカッションに参加することができた。この取組は大成功を収め、たちまち夜間学級に発展した。

一方、同コレッジに名前が冠されているモーリーとは、サミュエル・モーリー (Samuel Morley、1809-1886) のことである。毛織物製造業者にして自由党議員のモーリーは、19世紀に「慈善商人 (Philanthropic Merchant)」として知られていた。また、奴隷制廃止論者であり、社会改良や包摂ということを強く信じる人物でもあった。1886年に彼が死んだとき、成人教育カレッジ設立のために、多額の遺産をコンスに寄付した。

そして 1889 年、コンスは男女労働者のためのモーリー紀念コレッジ(Morley Memorial College for Working Men and Women)をロイヤル・ヴィクトリア・ホールの一角に開設した。男女の労働者が平等に学ぶことができる、同種の施設としては初のコレッジであった。その使命は、教育し、啓発することで、皆をともに包摂的で豊かな環境(an inclusive and affordable environment)に導くことであった。読み書きや計算のスキルを与える、労働者の将来に役立つ講義と並んで、芸術、ダンス、音楽のクラスを作ったことも、彼女の先駆的な態度が現れている。のちにモーリー・コレッジは、現在地である近隣のウェストミンスターブリッジ Rd に移転した(1924 年 12 月オープン)。

2022 年現在、モーリー・コレッジは、3つのセンター(19 世紀以来のウォータールー、新しく加わったノース・ケンジントンとチェルシー)と、3つのサテライト(ストックウェル、ロザーハイズ、カナリー・ワーフ)からなる組織となっている。ここで、Web サイトに掲載されているエマ・コンスの言葉を引用しておこう。

我々の仕事はあまりにもしばしば人々を分断してしまう深い割目に橋をかける ことである。

'Our work is to bridge the chasm which too often separates people.'



図 モーリー・コレッジ (稲富健一郎先生提供)

2. 日本への紹介

モーリー・コレッジは、第二次世界大戦以前、既に日本でも紹介されていた。文部省普通学務局『英国の成人教育運動:社会教育パンフレット第十九輯』(財団法人社会教育協会、1926年)は、「大学の活動」「地方教育官憲の努力」の後に続いて「篤志団体の成人教育運動」という項目を設けているが、篤志団体の項はさらに「一、成人学

校運動」「二、労働者教育協会」「三、労働者大学」「四、セツトルメントの教育事業」に分かれている。この「三、労働者大学」において、労働者教育を主要目的に設立された数多くの大学の一つとして「モーレー大学」を紹介している⁴⁾(そのほかに紹介されているのは、ロンドン労働大学、ヴオガン紀念大学、ロンドン婦人労働大学、ラスキン大学、労働大学、フアークロフト大学、チョルレー労働者教育協会大学、ウッドブルーク・セツトルメントである)。

モーレー大学 (一八八五年創立)

男女労働者に手工、其他の職業、商買等に直接関係し、又は応用されない知識科に対する高等研究を進め、年齢の関係上普通学校にて学ぶことの出来ない者に所定の初歩知識を授け、且つ生徒間に社交の機会を与ふることを目的として居る。一九一三年度の生徒数は千百二十五名で、七百八名に対して補助金の下附されたことは如何に真面目な研究をして居るかを示すもので、同年の学科は算術、英語、心理学、社会哲学、哲学、社会学、外国語、経済学、科学、料理法、裁縫、看護法、体操、観光、和声楽、旋律配合法等である。是等の学科は短きも数ヶ月に置り、長きは三年以上研究されるのである。学校の収入は、一九一三年の実際は千七百三十八磅余で、内五百磅はロンドン郡会から、三百五十七磅は文部省からの補助金である。生徒の月謝は二百八十九磅であった。

また、財団法人協調会による『英国とその成人教育』(1934年)でも、モーリー・コレッジが紹介されている。同書も「現在英国に於て成人教育事業に直接の参与をなしてゐるものは、多数の民間有志団体、諸大学、及び少数の地方教育当局であって」 5)と 3種の担い手を挙げ、それぞれに章を分けて論じている。そして、「周知の如く英国はデモクラティツクの国であり、成人教育事業の全発達過程を通じ常にその主動的地位を占むるものは民間有志団体である」 6)とあるとおり、全 155 頁(附録を除く)のうち、ほぼ 100 頁が民間有志団体の説明に充てられている。モーリー・コレッジも「労働者モーレー・カレッヂ」として民間有志団体の中に挙げられ、先に挙げた文部省普通学務局の資料よりも詳しく紹介されている。長くなるが、全文引用する 7)。

労働者モーレー・カレッヂ(Morley College for Working Men and Women、 London)

本カレッヂは一八八九年の創立に成る。本カレッヂの起源は一八八二年ヴィクトリア・ホールに一週一回の通俗科学の講演を催せしに始り、この講演会が動機となつてより組織的な教育を要望する声が揚り、一八八五年には一つの学級制度

のものとなり、更にまたモーレー紀念カレッヂとして本カレッヂの設立に至つた ものである。本カレッヂの名称は故サムエル・モーレ氏が本事業に多大の貢献を なせるを紀念するためのものである。本カレッヂはヴイクトリア・ホールと合併 して一八八九年九月二十九日開校された。この時以来婦人学生も男子同様入学を 許可さる」こと」なつたのである。

当カレッヂの目的はその規程(之に依つてロンドン市教区公益事業基金から補助金が交付される)に従へば、(一) 男女労働者に対し直接その職業に関係なき科目につき高等なる勉学を促進するにあること、(二) 年齢の関係上普通の教育機関を利用し得ない人々に須要なる基本的知識を得さしむべく之を援助すること、(三) 上述の勉学に従ふ人々に社交的生活を促進せしむること等である。

学生は十七歳以上の者に限り教師は約四十名を擁す。学生の大半は事務員及びタイピスト、残余は各種の賃銀生活者であつて学生数は約二千を数ふと云はれてゐる。学修期間は種々あり一、二ケ月の短期のものから三ケ年に亘るものもある。教科目は頗る広汎に亘り、文学、美術、英語、演劇、歴史、経済学、地理、外国語、音楽、体操、舞踊、家政的諸科目、数学、心理学、動植物学、物理学等であり、この内には当カレッヂの教師の行ふものゝ外、ロンドン大学聯合委員会及び同拡張部による大学輔導学級、大学拡張講演も含まれてゐる。猶ほ当カレッヂは学生中成績良好なるものに対し夏季学校或は他の機関を通じて、より深き研究の機会を与ふるため、普通一人当五磅を限度とする奨学金を与へてゐる。一九二六一二七年にはかくて五つの奨学金が提供せられた。

当カレッヂに於ては教室に於ける勉学の外、種々の施設による社交生活が奨励されてゐる。例へばコムモン・ルームを中心とした社交、或はスポーツ、演劇、文学等趣味を中心とせる諸倶楽部による社交の如きである。

カレッヂの管理団体たる評議員会は学生、教師、ロンドン県参事会、ロンドン市教区慈善財団(City Parochial Charities)及びローヤル・ヴィクトリア・ホールの代表者と之等評議員の選挙せる者により構成されてゐる。この外勧告的委員会がある。之は学生代表が主体となり之に教師の代表者を加へ、カレッヂ事業の発展改良に関し評議員会に提議し、また評議員会は必要事項を右委員会に諮り、評議員会とカレッヂ側との仲介となるべきものである。

当カレッヂはロンドン県参事会、ロンドン市教区慈善財団、ロンドン大学、文部省並にカレッヂ・ハウス財団(College House Trust)から補助を受けてゐる。一九二六一二七年に於ける総収入は五、〇〇四磅一一志一片であつて、この内他団体からの補助金は三、四六八磅一〇志(内訳、ロンドン市教区慈善財団より五〇〇磅、ロンドン県参事会より二、八三四磅、ロンドン大学拡張部より四四磅一志、文部省より九〇磅)で、その他カレッヂ・ハウス財団から二五磅、学生の授

業料一、二六七磅一八志一〇片、諸雑収入(寄附金二磅二志を含む)二四三磅二志三片であった。この外ロンドン県参事会は一八〇磅五志の追加補助金を与へてある。

当カレッヂと最も関係深きものはロンドン県参事会とロンドン大学である。前者は主として財政的方面に於て後者は教育事業方面に於て当カレッヂに援助を与ってゐる。

既に述べたる如くロンドン県当局は当カレッヂの評議員会に代表者を出す外、年々補助金を交付し時には特別補助金を交付してゐる。また一九二七年一月より十年間当カレッヂはカレッヂの一部をサウス・ウオーク及びバーモンドセイ昼間夜間学級に貸与すべき契約がロンドン県当局との間に成立し、その報酬としてカレッヂは向ふ三年間毎年七〇〇磅の使用料を受くることになつた。この契約は当時財政困難のカレッヂに大いなる助力となつたと云はれてゐる。またカレッヂで行ふ家政的学級の内保健学級の学生はロンドン県当局で行ふ試験に応ずることが出来る。

ロンドン大学は当カレッヂと提携し大学輔導学級及び拡張講演などの諸コースを当カレッヂ内に開いてゐる。之は単に会場としてカレッヂを使用するのでなく、之等の諸コースは当カレッヂの教育プログラムの中に編成されてゐるものである。かくて一九二六一二七年には準備輔導学級一(十九世紀の英国思想)、大学輔導学級一(心理学)、及び拡張講演二(経済学及び人類学)が開設されたが、二七一二八年には文学、経済学並社会史、心理学及び生物学の大学輔導学級、並に四つの拡張講演が開かれた。猶ほモーレー・カレッヂの学生は一般にロンドン大学の試験に応ずることが出来るやうになつてゐる。

なほ一九二六一二七年には一部の学生の要求により英国民踊協会の主催の下に国民舞踊の新学級が開設せられた。また当カレッヂの学生はローヤル美術協会 (Royal Society of Arts) の試験にも応ずることが出来る。

日本では稲富先生が渡英する半世紀前からその存在が知られていたことは、上記の 資料で明らかである。ただし、稲富先生が、なぜ英国留学に際してモーリー・コレッ ジで学んだのかを知る資料は、残念ながら筆者の手元にはない。渡英前にその存在を 知っていたのか、それとも現地で知り得たのか、不明である。

「付記]

旧字体で記された漢字は新字体に改めた。

「補遺の注〕

- 1) 以下のサイト (https://www.morleycollege.ac.uk/about/our-history/ [2022.5.4]) を参照。なお、モーリー・コレッジの歴史については、次の文献も参考になる。Denis Richards, Offspring of the Vic: a history of Morley College, Routledge and K. Paul, 1958.
- 2) エマ・コンスの生まれた年は、モーリー・コレッジの Web サイトでは 1838 年となっているが、次注の The Old Vic の Web サイトでは 1837 年となっている。
- 3) 1818 年にオープンしたロイヤル・コバーク劇場(Royal Coburg Theatre)を前身とし、1833 年にはロイヤル・ヴィクトリア劇場(Royal Victoria Theatre)、1871 年にはさらにロイヤル・ヴィクトリア・パレス(Royal Victoria Palace)と改称する。この1871 年にはじめて"The Old Vic"という言い方が Daily News に登場したというが、1870 年代には破産が続くなど厳しい財政状態にあった。1880 年にエマ・コンスが劇場のマネジメントを引き継ぐと、カンタベリー大主教やウェストミンスター公爵の支援を受け、ロイヤル・ヴィクトリア・ホール(Royal Victoria Hall)として再生した。エマ・コンスは1912 年に死ぬまで同ホールのマネジメントを続けた。The Old Vicの歴史については、The Old Vic の Web サイト

(https://www.oldvictheatre.com/about/more-about-us/[2022.5.5]) を参照。

- 4) 文部省普通学務局『英国の成人教育運動:社会教育パンフレット第十九輯』財団法人 社会教育協会、1926年、p.47。創立を1885年としているのは誤植だろう。
- 5) 財団法人協調会『英国とその成人教育』1934年、はしがきの p.2。
- 6) 同上、はしがきの p.1。
- 7) 同上、pp.127-129。

[謝辞]

本研究は科研費(20K02462)の助成を受けたものである。

山本 珠美 (やまもと たまみ)

神奈川県生まれ。香川大学生涯学習教育研究センター専任講師、准教授を経て、2019年4月より青山学院大学教育人間科学部准教授、2021年4月より同教授。博士(教育学)。専門は生涯学習論、社会教育学。主な著書は『近代日本の大学拡張:「開かれた大学」への挑戦』(単著、学文社、2020年)、『社会教育経営の基礎』(熊谷愼之輔・松橋義樹との共編著、学文社、2021年)。